

地理的分野 実践事例①

1 実施時 平成25年6月12日（市中学校社会科研究会研究授業）

2 単元名 世界各地の人々の生活と環境

「人間っていいな～生活の知恵と工夫」

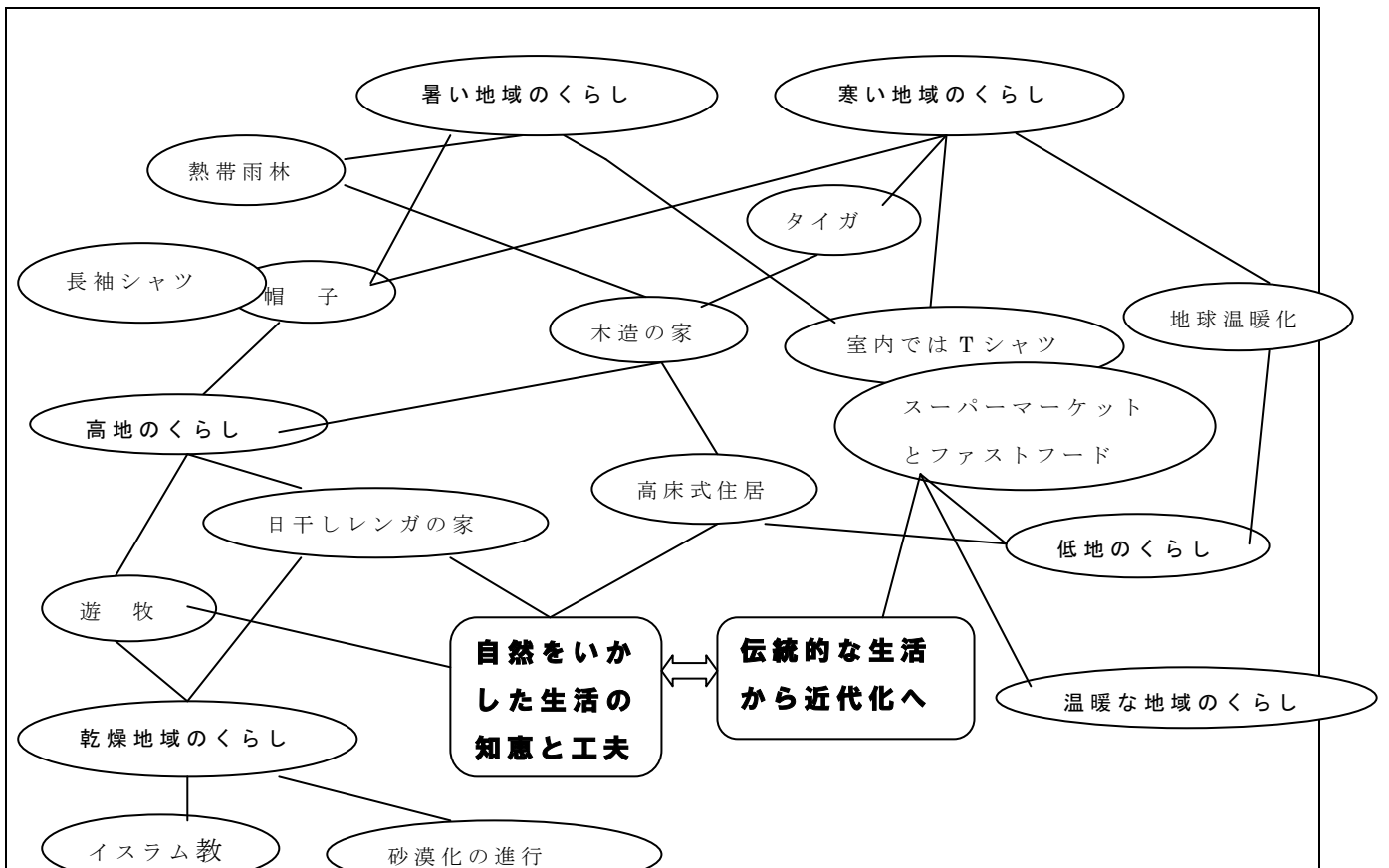
3 単元のねらい

本単元では、世界各地の自然および社会的要因の中で、その地域に適応しながら生活している人々の知恵と工夫について気づかせたい。その一方で、伝統的なくらしが変容しつつあり、衣食住といった基本的な生活レベルにも画一化が進行していることを理解させたい。さまざまな自然条件に順応しながらも、合理化・多様化されつつ変容していく様子を、身近な生活と照らし合わせながら考えさせたい。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
世界各地の人々の多様な生活や異なる文化の存在について意欲的に学習しようとし、また、それを尊重する態度を身につけている。	資料や写真から人々の生活を比較し、その違いや共通点を考え、表現している。	生活を調べるために、資料や写真から、生活の変容を読み取ったり絵日記にまとめたりしている。	多様な生活や文化、自然環境などを、地図を用いて示すことのできる知識を身につけている。多様な生活や環境、宗教との関わりを大まかに把握し、説明できる知識を身につけている。

5 単元の構想メモ



7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	「世界の形、地球の姿を知ろう」 世界地図での大まかな位置関係を理解できる。	・ワークシートにまとめさせる。 (大陸の位置や形、海洋の名前、赤道本初子午線、日付変更線を確認させる)
2	「世界地図に挑戦しよう」 簡略化した世界地図を、自ら描くことができる。	・アルバムシートに、作図させる。
3	「常夏の島でくらそう」 写真や資料を適切に読み取り、自分らしく表現する。	・アルバムシートに、絵日記で表現させる。 【拡散】
4	「世界一寒いところでくらそう」 写真や資料を適切に読み取り、自分らしく表現する。	・他の人と見比べたり、『気づいたこと』を書かせたりする。 【収束】
5	「高地での生活」「低地での生活」 環境に適応するための生活の工夫について、気がついたことをまとめる。	・アルバムシートにまとめさせる。 【収束】
6	「サハラのおちでくらすには」 (乾燥した土地にくらす人々) ・4人一組のグループで作業する。 ・それぞれ、日本との類似点・相違点について発表する。 ・くらしに結びついた宗教と生活の変化について知る。	・導入に、乾燥した土地に関するクイズに答えさせ、興味をもたせる。 ・イスラム教徒の風習などにふれる。
7	「温帯にもいろいろある」 (温暖な土地にくらす人々) ・「イタリア旅行記」か「イギリス旅行記」を書いてみて、それぞれを特徴づけるキーワードを見つける。	・ぶどう栽培の違い、住居の違いから、それぞれの気候やくらしを、雨温図などを使って日本と比較し、その特色に注目させる 【収束】
8	「くらべてみよう 各地のくらし」 ・4人一組のグループで意見を出し合う。 グループごとに発表する。 ・伝統的なくらしが、変化しつつあることを理解する。	・衣食住を中心に同じところ、違うところに着目させ、生活の知恵と工夫について考えをまとめさせる。 【統合】 ・伝統的な生活の工夫と、合理化・画一化されてきた現在の生活の様子に気づかせる。 【統合】
9	世界地図でふりかえり ・気候区分図で、今まで学習した国、地域をふりかえる。	・今まで学習した国や地域を、地図で確認させ、場所ごとの自然環境のちがいに気づかせる。 【統合】

地理的分野 実践事例②

1 実施時 平成24年10月

2 単元名 日本の諸地域 中部地方

「見て！〇〇を生かした地域の力」

3 単元のねらい

中部地方では、東海・中央高地・北陸のそれぞれの地域で特色ある農業や工業が発達している。その背景には、地形や気候などの自然条件や、他地域との結びつきや歴史や文化などの社会条件を生かしてきた工夫が見える。本単元では産業に注目して、地図作りや、キャッチコピー作りなどの活動を通して、人々の工夫を知り、地域に果たす産業の役割を考える。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・中部地方で発達した産業の背景にある工夫について、意欲的に学習しようとしている。	・中部地方の産業の地域的な違いについて、その理由を考えている。 ・中部地方の地域的特色を適切な言葉で表現している。	・データをもとに、わかりやすい地図を作っている。 ・各資料から、中部地方の産業の地域的な違いを読み取っている。	・中部地方の自然、産業、人口、歴史、生活文化について理解し、身に付けている。

5 単元の構想メモ



6 視点

<生徒を視点として>

生徒は、これまで「日本の諸地域」のうち、九州地方、中国・四国地方、近畿地方の学習を進めてきた。九州地方の学習では、畜産物の生産額を市町村別に示す階級区分図をつくり、畜産がさかんな理由を自然環境を背景とした視点で考察した。中国・四国地方の学習では、各都市の交通網を調べ、乗車時間を流線図に表すことで、他地域との結びつきと人々の暮らしについて実感した。近畿地方の学習では、近畿地方の重要文化財をドットマップに示し、歴史的な背景を視点にして学習した。

以上のように、これまでの学習では、さまざまな地図を作ることで、その地域の特色をとらえようと努めてきた。そのため、中部地方の学習では、新たにカルトグラムづくりを行い、自ら資料を作成すること、さらに、作成した地図から地域の特色を読み取ることで、地理的な見方や考え方をさらに深めていきたい。

<生徒に働きかける教師を視点として>

中部地方は、東海・中央高地・北陸の3地域ごとに、それぞれ特色を生かした産業が発達している地方である。

東海地方では、繊維工業から発達した自動車産業、温暖な気候を生かした野菜や果樹栽培が発達している。中央高地では、盆地周辺の扇状地を利用した果樹栽培や、製糸工業や戦時中に疎開した機械工場の技術を生かした精密機械工業などが発達している。また、標高の高い地域では、冷涼な気候を生かした抑制栽培が行われ、大都市に多く出荷されている。北陸地方では、豊富な雪解け水の有効利用から発達した米づくり、冬場の農家の副業として発達した伝統工芸や地場産業がさかんである。このように各地域の特色ある産業を視点にして単元を構成したい。

まず、どのような産業が発達しているのか実態を知るため、グループごとに、米の生産額などの六つのカルトグラムづくりを行う。カルトグラムは「位置」と「数量」を同時に把握できる資料であり、二つの事象を関連づけて考察できる。これまで学習した階級区分図やドットマップと違い、都道府県の形が大きく変化するため、生徒はこれまで以上に注意深く地図を読み取り、中部地方の特色をさまざまに予想して、拡散が図れると思われる。

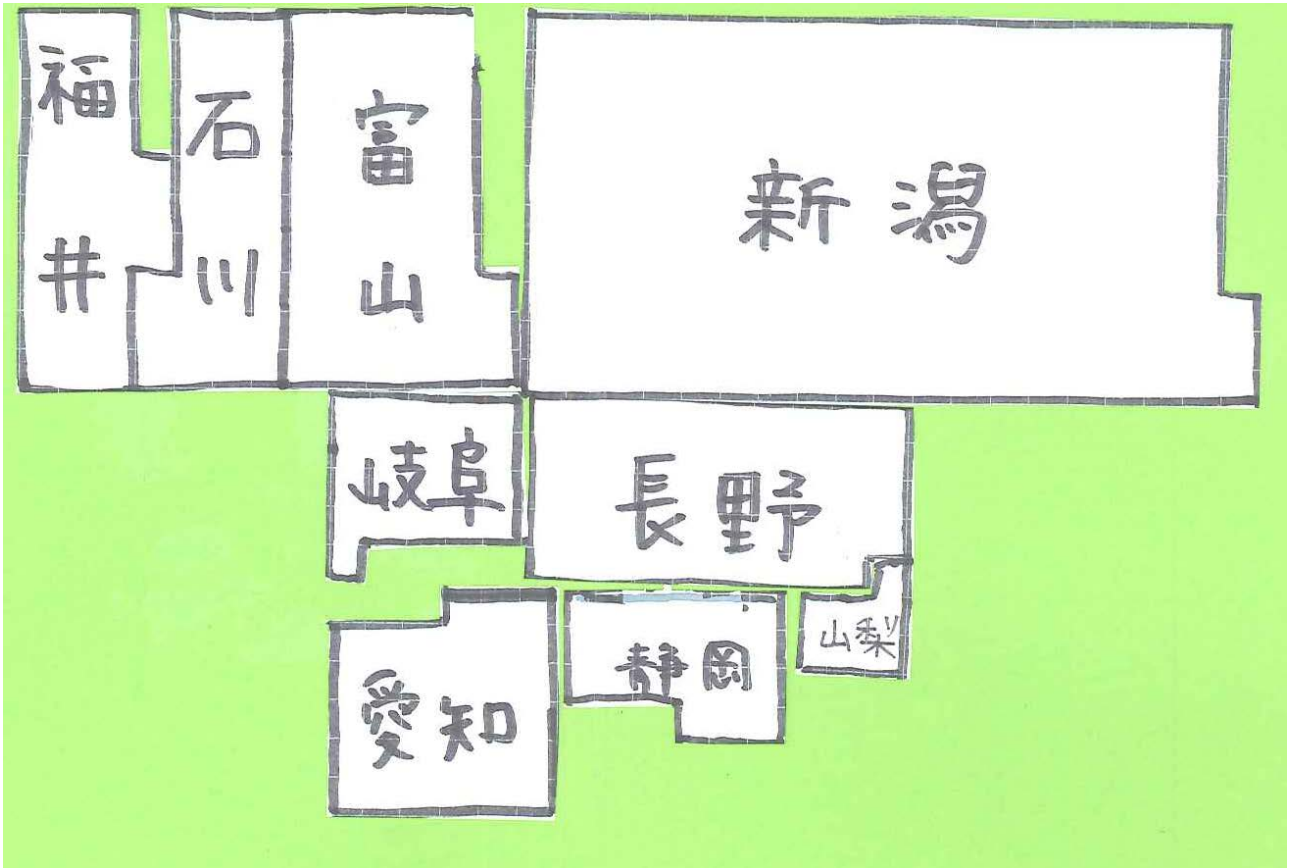
次に思考を収束させるために、六つのカルトグラムをそれぞれ比較して、ワークシートの東海・中央高地・北陸の「人口」「農業」「工業」「その他の産業」の項目に、気がついたことや調べてわかったことをまとめる。まとめたり、他の地方で学習したことを応用したりすることで、それぞれの地域の特色について、根拠をもって捉えることが可能となる。

最後に、それぞれの地域の特色を表すキャッチコピーを作り、相互評価する。以前に学習したことと関連させてキャッチコピーを作ることで、生徒は自分の学習をふりかえることができる。また相互評価をすることで、学級全体の考えが共有され、各々の思考が統合されていくものと考えられる。

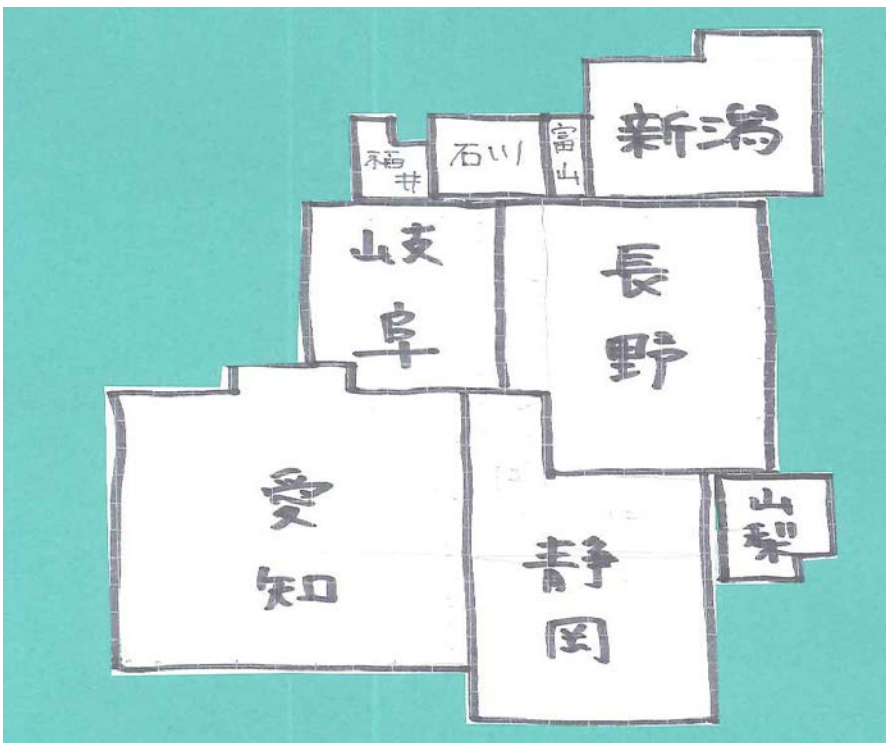
7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	中部地方の都市や山地、盆地、平野、河川、気候などを地図帳で確認し、白地図にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを用意する。
2	<p>中部地方の面積、人口を表すカルトグラムを読み取る。</p> <p>見本と同じように、それぞれのグループごとに、米産出額、野菜産出額、果実産出額、機械工業出荷額、伝統工芸品登録数、温泉地数（温泉地の宿泊施設数）のカルトグラムをつくる。</p> <p>グループごとに、作成したカルトグラムと気がついたことや特色を予想して発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 見本となるカルトグラム（面積、人口）を用意する。 グループごとに模造紙と必要な統計資料を用意する。 <p>カルトグラム作成時の注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> 1マスの単位を教師が指定する。 3色の色紙を用意し、東海・中央高地・北陸の3地域により、異なる色紙を使うように指示をする。 都道府県の形や位置の厳密さを求めない。 <ul style="list-style-type: none"> 自由な雰囲気発言できるようにする。【拡散】
3	前時で作成したカルトグラムを見比べ、気がついたことを表にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 地図を根拠にして、気がついたことを表にまとめさせる。【収束】
4	<p>東海・中央高地・北陸の各地域でそれぞれ特色ある産業が発達した理由を調べる。</p> <p> <ul style="list-style-type: none"> 交通網を生かした自動車産業 扇状地を生かした果樹栽培 気候を生かした高原野菜 歴史的な背景のある伝統工芸 など </p>	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習で学んだこととの関連を教科書や資料集を参考に調べ、考えさせる。【収束】【統合】 <p> <ul style="list-style-type: none"> 九州地方の促成栽培 中国地方の果樹栽培 近畿地方の伝統工芸 中国地方の臨海工業地帯 など </p>
5	<p>東海・中央高地・北陸の各地域をあらわすキャッチコピーを個人で考え、画用紙に書き、発表する。</p> <p>名前マグネットで投票をし、各地方を的確に表すキャッチコピーを一つに決定する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単元のふりかえりとして、キャッチコピーをつくり、各地域の特色をまとめさせる。【統合】

米の産出額をもとにして作ったカルトグラム



野菜の産出額をもとにして作ったカルトグラム



* 米、野菜ともに5mm方眼用紙の1マスで10億円
2009年の農業産出額をもとに作成

地理的分野 実践事例③

- 1 実施時 平成24年2月
- 2 単元名 身近な地域の調査
「金沢八景の錦絵から金沢区の未来を考えよう」

3 単元のねらい

名所絵 揃物『金沢八景』とは 歌川広重 によって描かれた錦絵で、当時観光地であった金沢、六浦の風光明媚な様子が表されている。しかし現在は開発が進み、当時のおもかげをしのぶことは難しくなっている。錦絵に描かれている金沢区の現代の様子を調査したり、新旧の地図を比較したりする中で、開発が進んでいる地域的特色やこれからどのように開発を進めたり、環境を保全したりしていくのかなどを話し合い、未来の金沢区について考える。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
金沢区について調査し、未来について積極的に参画しようとしている。	・金沢区の地域的特色について捉え、その理由を考えている。 ・未来について考えている。	・観察や調査を行い、さまざまな資料を集めている。 ・資料を選択し、主題図を作成している。	・地域的特色を理解し、その知識を身に付いている。 ・調査方法や発表方法を理解し、身に付いている。

5 単元の構想メモ

錦絵で描かれている場所に、実際に行って、海岸線の変化に着目して、昔の海岸線を予想したり、話し合ったりする。【拡散】

昔の海岸線を調べて地図に記入させたり、埋め立てられた土地の利用を色分けしたりするなどのデータを参考にして、海を埋め立て、山を削り土地を広げてきた地域的特色をとらえる。【収束】

これから、どのように開発を進めたり、環境を保全したりしていくのか、これからの金沢区についてグループで話し合い、プレゼンテーションをする。主体的に地域社会に関わろうとすることで、生徒の思考が社会参画に向かうようにする。【統合】

6 視点

〈生徒を視点として〉

生徒は小学校で、江戸時代前期、横浜の吉田新田を埋め立てた吉田勘兵衛や金沢八景周辺で塩田を開いた永島祐伯について学ぶことが多い。その後の金沢区の歴史については、中学校の「身近な地域の歴史調べ」で『金沢八景』の錦絵がなぜ描かれたのかという課題で学習を進める。金沢区は、歌川広重が描いたころには、風光明媚な観光地であり、錦絵はさしずめ観光パンフレットであったことを理解し、現在との対比へと関心を向けていきたい。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

前单元「身近な地域の歴史調べ」の終わりで生徒に錦絵に描かれている場所はどこかという発問をし、休日にその場所に行って写真を撮ってくることを宿題とする。実際にその場所に行けば、昔と現在では海岸線がだいぶ異なる様子に気がつき、思わず、「なぜこんなに変化しているのか」と考えさせることができる。生徒は当然、「埋め立てによって海岸線が変化した」と予想する。そこで「では、金沢区のどこが埋め立て地だろうか」と発問し、生徒に昔の海岸線を予想させ、拡散させることでさらに学習を進める。

次に、考えを収束させるため、18世紀の古地図（埋め立てが進んでいない）、明治時代の鳥瞰図（入江が埋め立てられている）、昭和初期の地図（平潟湾の埋め立てが進んでいる）などを参考にして、現在の2万5千分の1の地形図にそれぞれの時代の海岸線を記入させる。また埋め立てられた場所の土地利用を宅地や商業地、工業地、その他で色分けさせる。江戸時代に、内川入江（泥亀周辺）が塩田となり、昭和初期、湘南電鉄（現京浜急行）が開通してから平潟湾周辺が宅地となり、戦後は金沢区周辺の丘陵を削り宅地化し、富岡周辺の海岸線が工業団地になっていった。このように山を削って海を埋め立て、だんだんと土地を広げてきた地域的特色をとらえる。

埋め立てや開発が行われる中で、これから、どのように開発を進めたり、環境を保全したりしていくのか小グループでさまざまなアイディアを出し合う。その際に、保護者や地域の方などにインタビューしたり、インターネットで調べるなどして、金沢区の課題に着目して考えをまとめていき模造紙を使ってプレゼンテーションをする。これから金沢区はどのようにするべきかを考えていくことで、生徒の思考を外側に広げ、現実社会に触れさせることで統合させていく。



7 単元の流れ

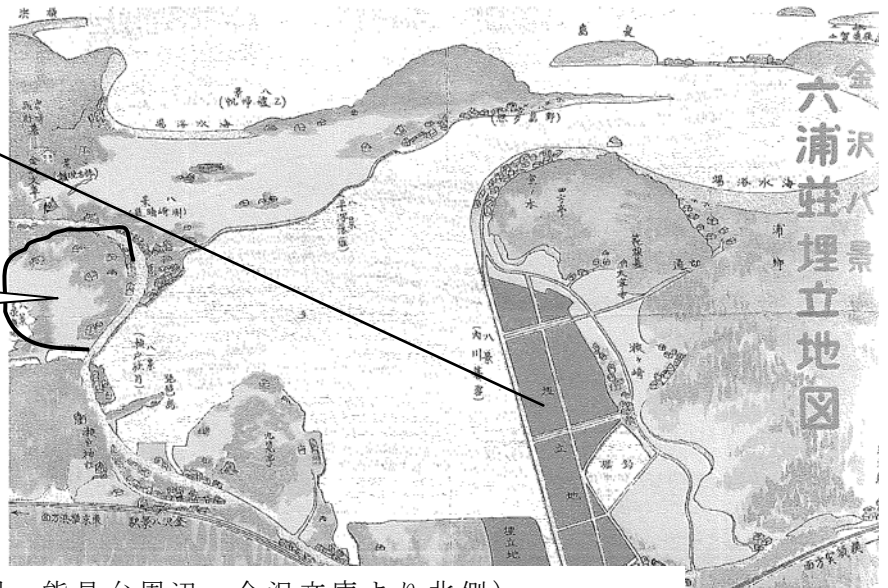
	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	前単元の終わりで・・・ ・「錦絵に描かれている場所はどこか」 実際にその場所に行って写真を撮ってくる。	・実際にその場所に行くことで、切実感をあたえ、この単元での生徒の考えを広め、深めさせる。
2	「金沢区のどこが埋め立て地か」小グループで話し合う。	・地形図を参考にして、どこが埋め立て地か予想させる。【拡散】
3	18世紀の古地図（埋め立てが進んでいない）、明治時代の鳥瞰図（入江が埋め立てられている）、昭和初期の地図（平潟湾の埋め立てが進んでいる）などの資料をもとに、地形図に昔の海岸線を書く。	・データを与えることで、考えに根拠を与える。【収束】
4	埋め立てられた場所の土地利用を宅地や商業地、工業地、その他で色分けする。	
5	江戸時代に、内川入江（泥亀周辺）が塩田となり、昭和初期、湘南電鉄（現京急）が開通してから平潟湾周辺が宅地となり、戦後は金沢区周辺の丘陵を削り宅地化し、富岡周辺の海岸線が工業団地になっていった。このように山を削って海を埋め立て、だんだんと土地を広げてきた地域的特色をとらえる。	* 金沢区周辺の施設や工場に注目させる。（シーサイドマリーナ、日産追浜工場等）
6	これから、どのように開発を進めたり、環境を保全したりしていくのか小グループで考え、模造紙にまとめていく。	・金沢区のこれからを考える【収束】 発想が豊かに広がるようにブレインストーミングなどを行う。（拡散） ・保護者や地域の方などにインタビューをしたり、インターネットで調べるなどしたりして、金沢区の課題などを調べ、考えをまとめていく。（収束）
7	小グループで模造紙に書いた自分たちの考えをポスターセッション形式で発表し、クラスでみんなの考えをシェアする。	・主体的に地域社会に関わろうとすることで、生徒の思考が社会参画に向かうように統合させる。【統合】

金沢区の地図 『図説かなざわの歴史』『翔べ金沢』より

18世紀の古地図（金沢文庫～金沢八景周辺）



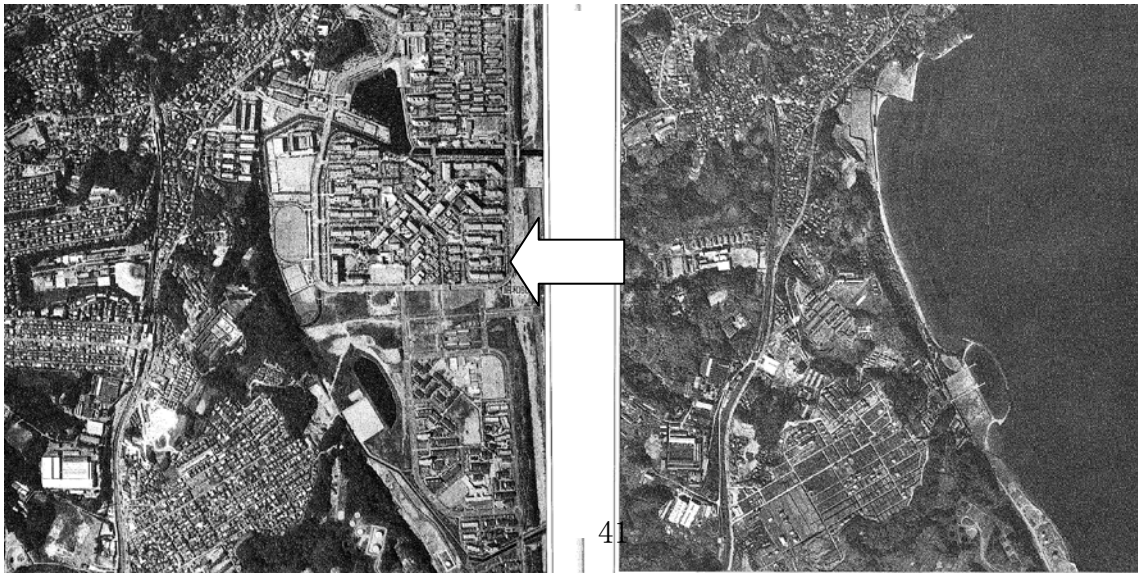
昭和初期の宅地の埋め立ての地図（文庫～八景周辺）



右の地図の埋め立てられた海

上の地図で、入江だった部分。

工場地帯の埋め立て（現在の富岡・能見台周辺 金沢文庫より北側）



歴史的分野 実践事例①

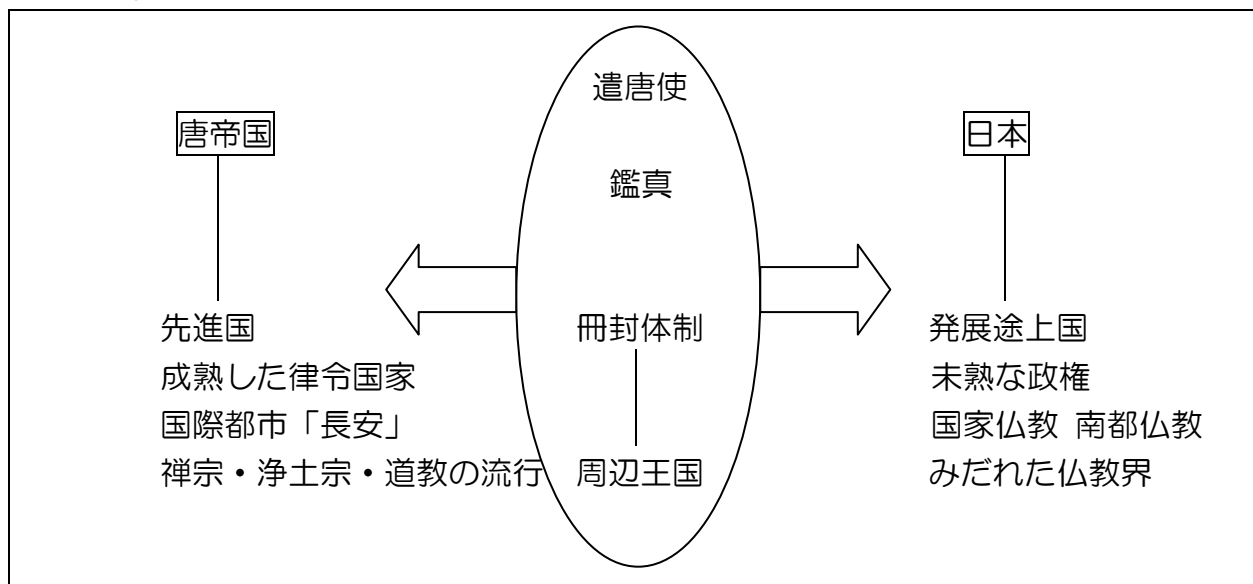
- 1 実施時 平成25年7月
- 2 授業名 古代までの日本 仏教の伝来とその影響
「鑑真はなぜ日本に来たのか？」
- 3 授業のねらい

唐の有名な僧侶であった鑑真は、なぜ危険を冒してまで来日し、律宗を日本に伝えたのであろうか。このような疑問を生徒に投げかけることによって、唐代の東アジア世界のなかの日本の社会や、当時の東アジアの国際情勢を考えさせたい。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
東アジアとの関わりなど、古代までの歴史的対象に対する関心を高め、意欲的に追究し、古代までの特色を捉えようとするとともに、古代までの文化遺産を尊重しようとしている。	東アジアとの関わりなどについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	東アジアとの関わりなどに関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解し、その知識を身に付けている。

5 単元構想メモ



6 視点

〈生徒を視点として〉

鑑真という有名な僧侶が唐からやってきて、日本の仏教の発展に寄与したことは小学校ですでに学んでいる。これらの知識を踏まえた上で、本単元では「鑑真は、なぜ日本にや

ってきたのか。」という疑問を生徒に投げかけたい。鑑真が日本に来た理由を考えていくことは、この時代の東アジアの国際情勢や日本の社会を見つめ直すことに、大きな役割を果たすと思われる。また、少ない資料からその時代の社会を見つめようとする古代史を研究するおもしろさも生徒に体験させたい。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

本単元では、生徒の考えを拡散させるため、鑑真が日本に来た歴史的事象について「なぜ」という疑問を投げかけたい。

鑑真が来日したことで、日本の仏教が大きく発展したことは、多くの研究者が認めることであろう。しかし、鑑真が危険を冒してまで来日した理由を、単に「鑑真がいい人だったから」と短絡的に捉えることは生徒の思考を促すとは言い難い。そこで、来日に伴う多くの危険や鑑真を取り巻く唐の社会情勢を、資料として提示し、当時の東アジアの国際情勢や唐と日本の社会情勢を背景にして、鑑真自身が決意した理由をグループで話し合う中で考えを収束させていきたい。また、なかなか考えがまとまらない場合、当時の国際情勢を図式化するなど工夫もしていきたい。

最後に鑑真の決意を自分のこととしてとらえ、学習をふりかえることで統合に向かわせたい。ここで学習したことは、ザビエルについて学習する際にふりかえることができる。

7 授業の流れ

生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
鑑真来日の理由を予想してグループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・「唐の有名な僧侶である鑑真は、なぜ日本に来たのか？」発問する。【拡散】 4、5人のグループに分ける。
当時の唐や日本などの国際情勢、唐の仏教について詳しく記した資料を見て、考えをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑真の時代までに中国では過去に2回大規模な廃仏運動があった。また唐では禅宗や浄土宗、道教が流行していた。
鑑真来日の理由を、資料を参考にしてもう一度予想してグループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を参考にしたり、当時の国際情勢を図式化したりして、考えをまとめさせる。 <p>【収束】</p>
鑑真の決意を自分のこととしてとらえ、理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・「鑑真を取り巻く環境がこのようなか、発展途上国とはいえど、一国のリーダーから熱烈な来日の要請を受けた。君が鑑真だったらどうする？」と発問する。 <p>【統合】</p>

歴史的分野 実践事例②

- 1 実施時 平成25年2月
- 2 単元名 近代の日本と世界 近代国家の形成

「日本語はいつから日本語？」

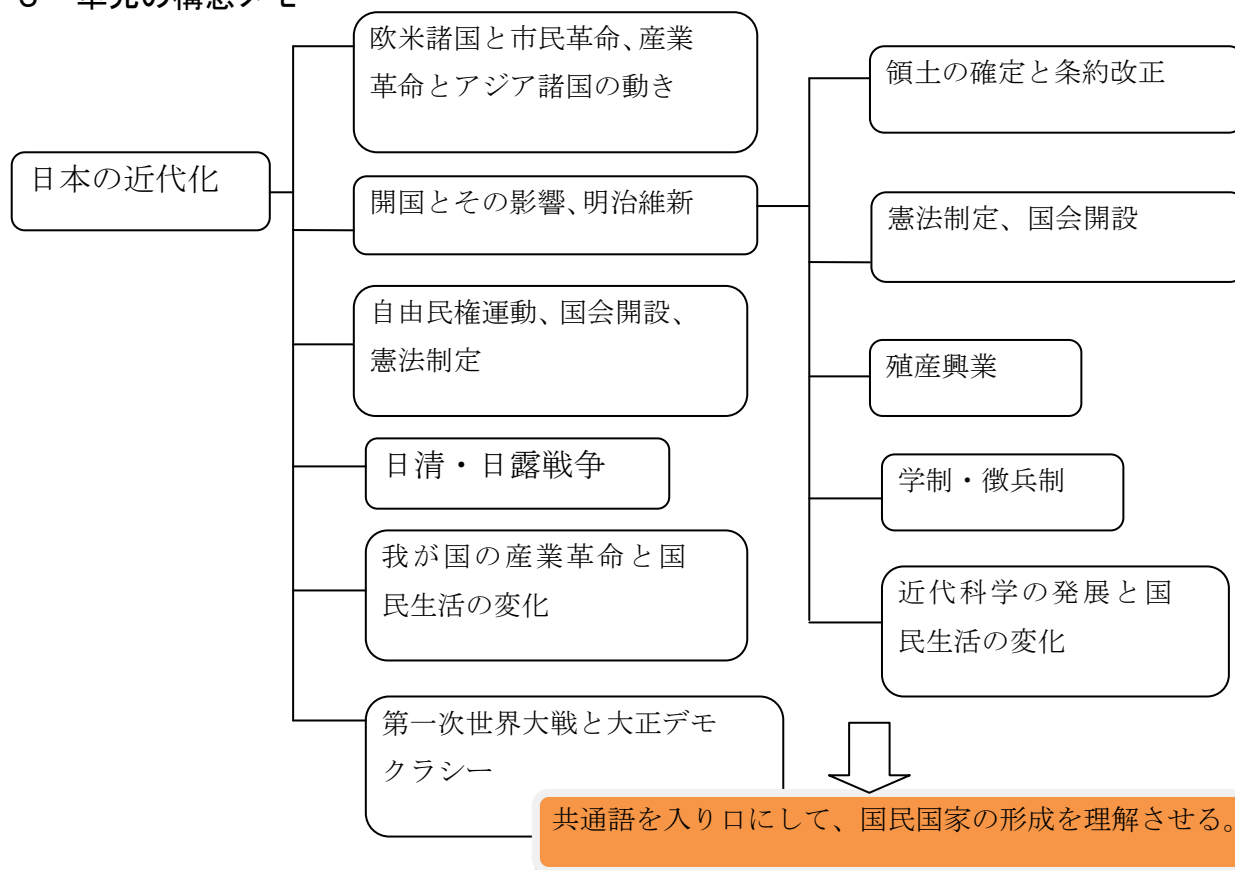
3 単元のねらい

国際化する社会の中で、言語は大きな課題である。私たちが授業で用いている共通語について、いつ、どのように成立したのか、あらためて問うことで、近代国民国家の成立について考えることができる。また、近代という時代について、自分なりにとらえ、表現することができる。ここでは、樋口一葉の『たけくらべ』と有島武郎の『一房の葡萄』を読み、口語と文語の違いを見出す。方言などについても考えながら、学校での学習言語について気づく。共通語の誕生が、さまざまな政治、社会の動きと関連していることに気づき、思考を深めることができる。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
言語の変化と時代の変化との関係について、関心をもつことができる。さらに、時代の特徴と人々の生活の変化の関係について調べようとしている。	言語の変化は、時代背景とともにあり、特に、近代国民国家の成立と共通語の広がりについて理解し、自分のことばで表現している。	『たけくらべ』『一房の葡萄』を読み、文語表現と口語表現に気づき、年表と対照させて、時代背景を読み取っている。	近代国民国家の成立に関連する事項と、共通語と関連させながら整理し、理解している。

5 単元の構想メモ



6 視点

〈生徒を視点として〉

これまで、前近代の学習をしてきた生徒が、近代の学習になったとたんに、難しく感じたり、興味が薄れたりすることがしばしば見られる。しかし、近代国民国家の成立とその展開という視点で日本の近代史を捉えなければ、今の私たちの社会にある、さまざまな課題に取り組むことは難しい。そこで、ここでは、自分たちが毎日用いている言葉を入り口として、国民国家の成立を捉えさせたいと考えた。

樋口一葉の『たけくらべ』と有島武郎の『一房の葡萄』を手掛かりとして、国語の古文の知識も活用して、時代相をつかませる。二つの資料を読んで、どちらが古い作品かを考え、二つの作品の間にあった社会的なできごとを整理して、国民国家の成立と共通語の関係について考えさせる。

このことから、共通語の成立時期は、19世紀末から20世紀初頭の時期であること、この時期には、憲法の制定、議会のはじまり、義務教育就学率の上昇、日清戦争、日露戦争などの社会的事象があることを理解させる。そして、自分たちの使用している言語が、実は、こうした歴史的な背景のもとに成立し、現在では、方言がどんどん使用されなくなっている状況があることにも気づかせたい。また、他のアジア諸国についても関心を持つことができると、学習に広がりが出ると考える。

〈子どもに働きかける教師を視点として〉

二つの文学作品を提示することで、どちらが今、自分たちが使っている言語に近いかを読み取らせる。次に、この二つの作品の成立時期の間に、どんな社会的なできごとがあったのかを考えさせることで、思考を拡散させ、年表を使って整理させ、それぞれの事象の関連を考えさせる。特に、言語との関係については、いろいろな想像を働かさせて、思考を促す。

共通語の成立時期が、日本の近代国民国家の成立時期に重なることを理解させ、一旦思考を収束させたのちに、現代社会への影響や、外国との関係にまで思考を広げて、自分の使っている言語について考えることで、自分たちのアイデンティティーについても考えることができるように、ゆさぶりをかけたい。自分たちの社会が近代社会であることを認識し、思考を収束させる。

7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	<p>二つの作品を読み比べ、今の言語に近いものと、古典のように感じるものがどちらか判断する。</p> <p>この二つの作品が、成立した時期（1895～1920）を知り、この25年間にあったできごとをあげてみる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アルバムシートを活用して、共通語についての学習から国民国家の成立について考えさせる。 ・『たけくらべ』『一房の葡萄』を読ませ、どちらが古い時代に書かれたものか判断させる。 ・言語の成立が、社会事象と関連していることから考えを広げる。 <p>【拡散】</p>
2	<p>できごとそれぞれの関連を考え、リンクマップに表現する。</p> <p>就学率と共通語の関係にも気づく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リンクマップを書かせることで、相互の関連を理解する。ただし、あくまで、共通語の成立との関係を意識させる。 ・就学率の変化のグラフに、二つの作品の成立時期を入れる。
3	<p>自分たちが学校で習う国語やテレビなどで用いられる共通語の成立は、近代国民国家の成立と同時期のものであることを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちが、何気なく使っている言語が、かなり意図的に作られたものであることを知るとともに、言語も、近代化の重要な要素であること、学校が果たした役割などにも関心をもつ。 <p>【収束】</p>
4	<p>今の自分たちが使っている言語の変化から、社会の変化との関連を考える。英語、スペイン語などの西洋の言語の成立や、アジア諸国の共通語の成立などについて関心をもつ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今の若者、子どもの使っている言葉と、60歳以上の人の言葉遣いの違いなどを考え、社会的背景に気づかせる。 ・英語をはじめ、アジア諸国の言語にも関心をもたせる。 <p>【統合】</p>

歴史的分野 実践事例③

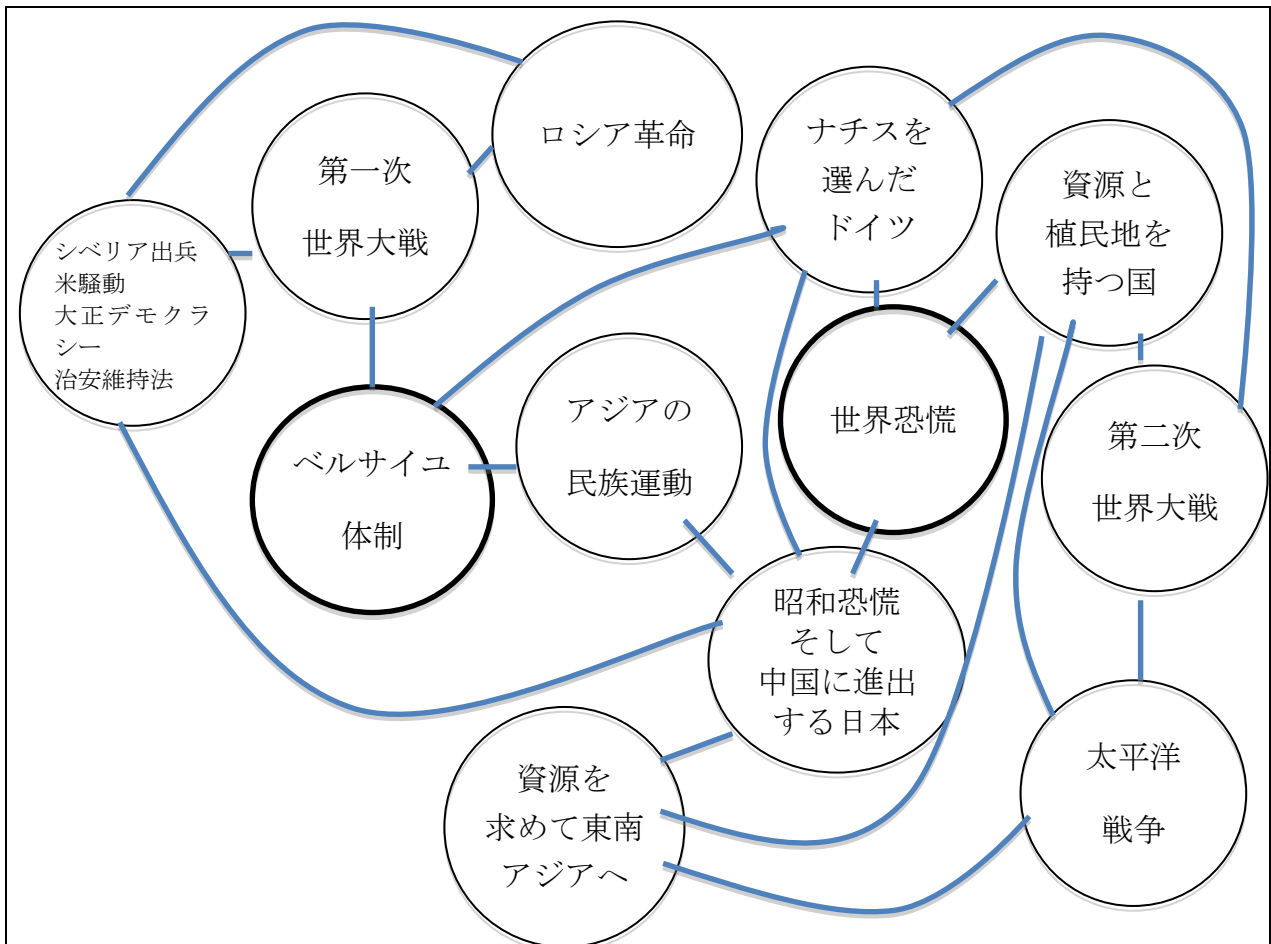
1. 実施時 平成24年4月
2. 単元名 「日本は戦争を防ぐことができなかったのか」～二つの世界大戦と日本～
3. 単元のねらい

歴史のある時点（1945年8月15日）を設定して、その時点での情勢や動向を踏まえ、なぜ戦争に向かっていったのか、戦争を防ぐ選択肢はなかったのかを考察し、第一次世界大戦から第二次世界大戦への大まかな歴史の流れをつかんで、自分の表現でまとめられるようにする。

4. 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
二つの世界大戦に結びつく歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に学習しようとしている。学習を通じて国際協調の大切さを考えようとしている。	二つの世界大戦を通じて、なぜ戦争に向かったのか、戦争を防ぐ選択肢はなかったのかという課題を多面的、多角的に考察し、公正に判断して、自分の考えをまとめている。	問題解決のための適切な資料を探したり、正しく読み取ったりしている。	時代の特色を世界の歴史を背景に理解して、その知識を身に付けている。

5. 単元の構想メモ



6. 視点

〈生徒を視点として〉

歴史の授業では、時代ごとに当時の情勢や動向を踏まえ、なぜそういう結果になったのか、他の選択肢はなかったのかを考察する工夫をおこなってきた。歴史に「もし」はないが、「よかった」とか「よくなかった」という結果重視の考え方よりも、「なぜ」「どうして」という見方を意識することで時代の背景まで考えを深め、「大まかな歴史の流れをつかむ」ことに結び付くと考えた。さらに、時代を俯瞰する課題学習をすることにより「自分の表現でまとめる」ことにつながると考えた。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

歴史の授業を受けるとき、多くの生徒にとって、時系列に羅列された項目を暗記することが目的になって、自分自身と歴史の関連性を見出すことができない状況がある。特に近現代史の場合、歴史への無関心や理解不足はそのまま、現代社会を生きる上での力不足になりかねない。二つの世界大戦の時代を俯瞰しつつ、なお、自分自身に関連する意識を持たせるやり方はないかと考えた。

そこで「1945年8月15日」に立って考えることを意識させることにした。すなわち、なぜ戦争が起きたのだろうか？戦争を防ぐことはできなかったのだろうか？という視点である。「戦争に向かうもの」「戦争を回避できるもの」というキーワードによって二つの世界大戦の時代を捉えてみることにした。実際に授業を展開する中では、ターニングポイントになる事象を意識して授業をおこなった。当時の情勢や動向を踏まえ、なぜそういう結果になったのか、他の選択肢はなかったのかを考察することができるように発問や教材を準備した。

①授業の視点

- ・国民の教育や生活はどのように変化したか。
- ・情報は国民にどのように伝えられたか。
- ・経済の状況はどのように変化していったのか。
- ・どのように政治は変化していったか。
- ・国民生活はどのように変わっていったか。
- ・植民地支配と民族自決の対立はどのように進んだのか。または、合意に向かったのか。
- ・人権の尊重はどのように進んだか、または抑制されたか。
- ・それぞれの国はどのような動きを見せたか。

②気づいて欲しいキーワード例

関東大震災、軍国主義、〇〇（軍事）同盟、〇〇条約、〇〇軍縮会議、国家総動員法、国際連盟、〇〇事件、〇〇事変、〇〇出兵、政党政治、世界恐慌、〇〇戦争、大正デモクラシー、大政翼賛会、大東亜共栄圏、大戦景気、治安維持法、ファシズム、普通選挙、満州国、ロシア革命、教育、情報、人権、民族自決など

③カードの説明の例（図や資料を集めるのもよい）

「ベルサイユ条約は、戦勝国の権益を重視するあまり敗戦国への処分が厳しすぎたので、のち

にナチス政権誕生の原因の一つになった。」

「五・一五事件は、政党政治（選挙による多数決＝国民の意見）を尊重する政治と話し合いを否定して、政治家が軍人に物言わなくなる原因をつくった。」

7. 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	<p>●戦争についてのイメージをもつ 戦争(戦・軍・兵などの漢字)をキーワードにして、年表に印をつけてみる。 戦争のイメージを絵やことばで画用紙にかく。 戦争が起きる理由を考える。</p>	<p>・戦争に関わる人が多いことに気づかせる。 【拡散】</p>
2 5 18	<p>●基本的なことがらを学習する ①第一次世界大戦とベルサイユ条約 ②大正デモクラシー ③世界恐慌と日本の不景気 ④第二次世界大戦と国民生活</p>	<p>・ビデオ・写真・資料を活用する。 ・キーワードになる用語などを確認しておく。 ・さまざまな資料から考えを深めさせる 【収束】</p>
19 5 20	<p>●戦争を防ぐことができなかつた理由を考える ・単元で学んだことばやできごとをプリント（ノート）に書き出す。 ・一人一枚画用紙に書いて黒板に貼り出してみる。 ・貼り出されたことば・できごとについて、戦争との関わり（平和との関わり）という視点で、説明文などを書く。（班 or 個人） ・説明文をみんなの前で発表する。 ・班（グループ）をつくり、黒板に貼り出したカードを「戦争につながるもの」「戦争を防ぐ力になったもの」「どちらともいえないもの」に分類する。 ・グループ討議をもとに、クラス全体で分類する。 ・単元のまとめ 戦争を防ぐために必要なことがらや考えかたをまとめる。 ※戦争と平和のターニングポイントを考えてみる。</p>	<p>・「どちらともいえない」は、使い方、立場、視点によって「戦争につながる」「戦争を防ぐ」のどちらにもなるということに気づかせる。 ・個別指導して、あまり書き出せていない生徒を優先して画用紙の担当を決める。 ・書き出したことばを戦争（平和）との関係で説明できるよう支援する。 ・「つながる」「防ぐ」の両方の意見が出たものは「どちらともいえない」に分類するように助言する。 ・書き出したことばを分類して、戦争を防ぐために必要なことがらや考え方に気づかせる。 ・戦争と平和のターニングポイントを考えさせる【統合】</p>

公民的分野 実践事例①

- 1 実施時 平成24年6月
- 2 単元名 私たちが生きる現代社会と文化
「都会の盆踊りをどう継承するのか？」

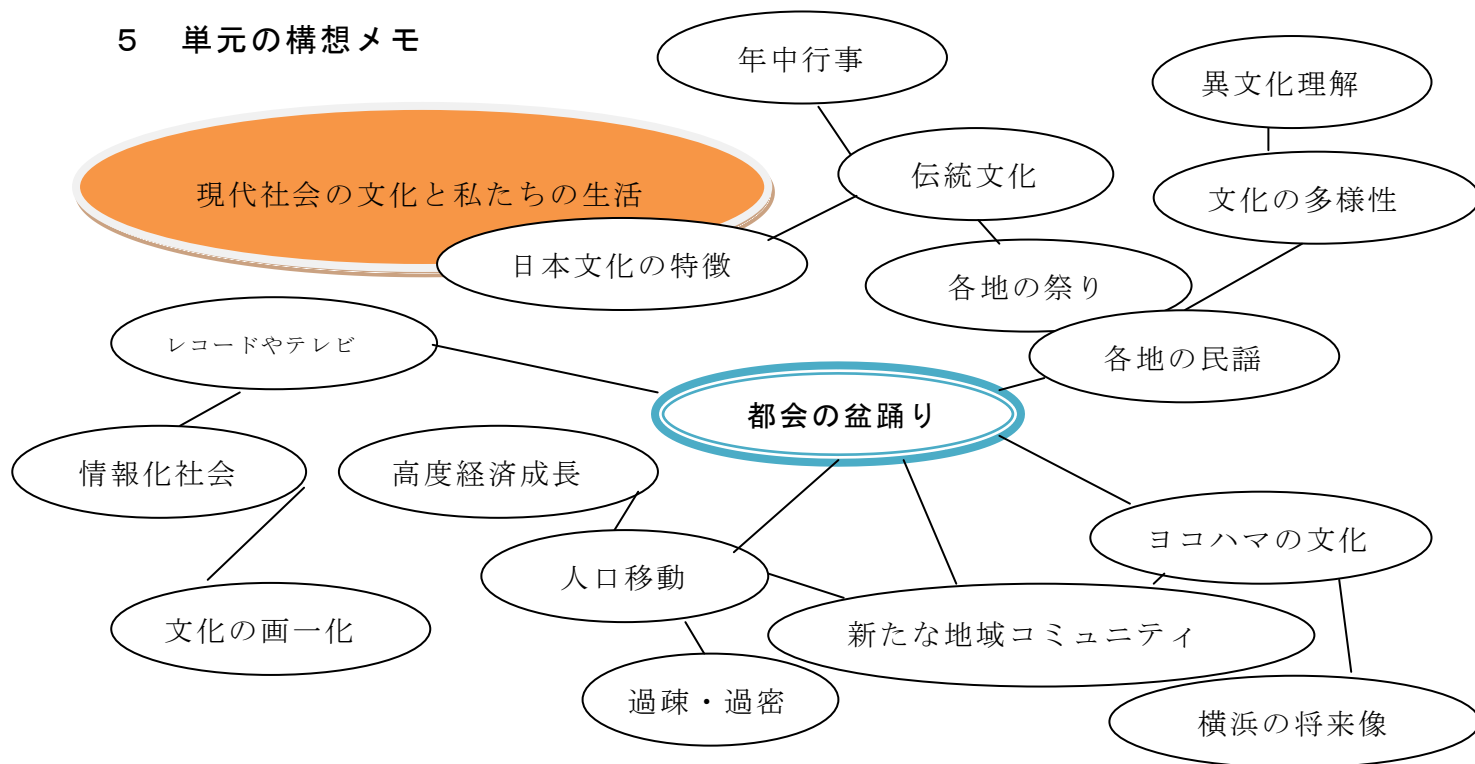
3 単元のねらい

高度経済成長期、農村から都市への人口移動が起こったことから、都市では多様な地方の文化を垣間見ることができる。それぞれの地方の伝統文化に彩られた都市の盆踊りに着目し、盆などの年中行事の意義や盆踊りなどの伝統文化やさまざまな地方の人々が集まる地域コミュニティの文化をどのように継承・創造していくのかを考える。また、新たな伝統文化が生まれていることに気がつく。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
身近な地域の様子から、身近な地域の伝統文化に対する関心を高め、興味をもって追究している。	身近な地域の行事を、人口移動や歴史的変遷、情報化社会、文化の画一化と関係づけて考え、文化の意義や地域コミュニティの文化の継承について考えている。	身近な地域の伝統文化に関する資料から有用な情報を活用し、適切に読み取っている。	日本人の宗教観や自然観と結びついている伝統文化を理解し、文化の意義についての知識を身に付けている。

5 単元の構想メモ



6 視点

〈生徒を視点として〉

生徒は、地理的分野の学習を通じて、人口の集中や移動、過密、過疎などについて理解している。また、東北地方の祭りや伝統についても学習を深めた。さらに、人口が急激に増加した横浜に居住しており、自らのルーツについても関心が高い。また、地域の祭りに参加したことがある生徒もほとんどである。

そこで、これらの体験的な学びを生かして、身近な祭りや日本の伝統文化をつなげて考える。地域コミュニティの文化の継承と創造の意義、多様性に気づかせると同時に、学校で学習することを自らの生活と結びつけて考えられるようにする。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

身近な地域の祭りや盆踊りを拡散の材とし、そこから、その祭りや盆踊りがいつできたのか、なぜさまざまな地方の踊りが都会にあるのか考えさせる。収束の材として、高度経済成長期の全国の農村人口と都市人口の折れ線グラフやそれぞれの民謡のレコードの売り上げ枚数、民謡の発祥などの資料を示し、各地の農村から、京浜工業地帯に多くの労働者が集団で移住したこと、地方の民謡の音源がどこでも入手できるようになったこと、情報化社会が進んだことでテレビなどのメディアによって文化の画一化が進んでいることなどを理解する。統合として、このことから単元のはじめに取り上げた身近な地域の祭りや盆踊りをつくり上げた人たちの苦労について知り、自分たちの地域コミュニティの文化がどのように継承・創造されてきたかを理解し、自分たちの暮らす横浜の将来像についても思いを馳せる。



7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	<p>身の回りの年中行事をあげる。</p> <p>身近な地域の盆踊りについて発表する。</p> <p>それぞれの盆踊りの発祥について資料から読み取る。</p> <p>炭坑節や花笠踊りなど、地方色のある踊りが、なぜ自分たちの地域の祭りに踊られるのか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースで取り上げる年中行事などの映像資料を見せるなどする。 ・身近な地域の盆踊りはどんな踊りか発表させる。 ・どの地方でいつ頃生まれたものか資料を提示する。 ・さまざまな発想が広がるように雰囲気づくりに心がける。【拡散】
2	<p>なぜ、都会でさまざまな盆踊りが踊られているか、さまざまな資料から考える。</p> <p>なぜ身近な地域で祭りや盆踊りといった、伝統行事を行うようになったか考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・都市人口、農村人口の変化の折れ線グラフ、東京音頭などのレコードの売り上げ枚数、それぞれの民謡の発祥などから考えさせる。【収束】 ・古くからの住民のインタビューを紹介し、経緯や当時の住民の思い、地域コミュニティの文化について理解させる。【収束】
3	<p>未来の地域づくりにむけて、自分たちは何ができるか、どのような地域にしていきたいかを踏まえて、地域の盆踊り、夏祭りへの参加の仕方や新しい祭りの提案を発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本各地から人口が流入してきた地域で、さまざまな民謡や踊りを取り入れ、祭りや盆踊りを地域のつながりのために作り上げてきた事実や、情報化によって文化が画一化されていることなどを知らせる。 ・ヨコハマ独自の文化の継承も含め、自分たちの地域のこれからの伝統文化について考えさせる。【統合】

公民的分野 実践事例②

1 実施時 平成24年11月15日（市中学校社会科研究会研究授業）

2 単元名 国民の生活と政府の役割

「あなたの50年後を考えてみよう」

3 単元のねらい

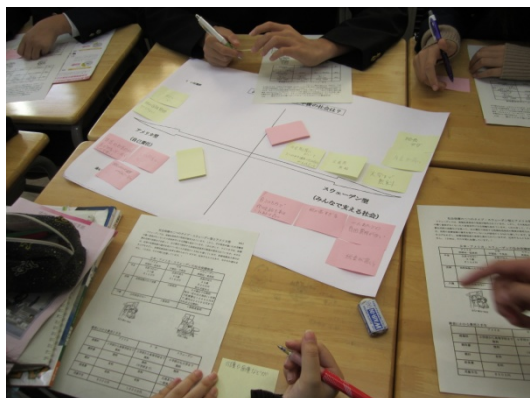
本単元では、「あなたの50年後を考えてみよう」という長期的な視点に立って、少子高齢社会や多額の国債の問題など解決しなければならない課題を見つめさせたい。また税制と社会資本の整備、環境の保全、社会保障の充実など、国や地方公共団体が果たしている役割について学習させる。

その際、財政の役割について税の負担者として自分の将来とかかわらせて生徒自身に考えさせ、自分の意見を持ち、他の生徒の意見を尊重し必要に応じて取り入れながらそれを表現できることをめざしていく。

そして、諸政策にかかる財源の確保と配分というところでは、効率と公正という視点に基づいて議論がなされ、対立する意見が出されていること（対立と合意）を伝えたい。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
少子高齢社会のなか、自分たちの50年後の生き方を考えることを通して、国や地方公共団体の経済活動に対する関心を高め、長期的な視点に立って望ましい財政について意欲的に追究し、自分の考えをまとめようとしている。	国や地方公共団体が果たしている経済的な役割や財政について多面的・多角的に考察し、少子高齢社会の中で税制とその配分、望ましい財政について資料に基づき、50年後の将来を見据え様々な観点や立場から公正に判断し、表現している。	日本の財政的な課題、国や地方公共団体の経済活動に関する様々な資料を収集し、学習に役立つ有用な情報を適切に選択して活用するとともに、追究し考察した過程や結果をまとめたり、説明したりしている。	社会資本の整備、公害の防止など環境の保全、社会保障の充実、租税の意義と役割及び国民の納税の義務について理解し、その知識を身に付けている。



5 単元の構想メモ



6 視点

<生徒を視点として>

本校の生徒の多くは、社会の諸問題について関心が低く、誰かが、なんとかしてくれると考えると思われる。対立と合意、効率と公正では生徒にとって身近な「ゴミ集積所のルールを考える」ことを通して、政治の単元では選挙ゲームなど生徒が「自分のこと」として考える授業を通して、グループの話し合いを進めてきた。この単元でも少子高齢社会や多額の公債など解決しなければならない諸問題について、生徒にとって切実感のある材を与え、グループで考えさせたい。

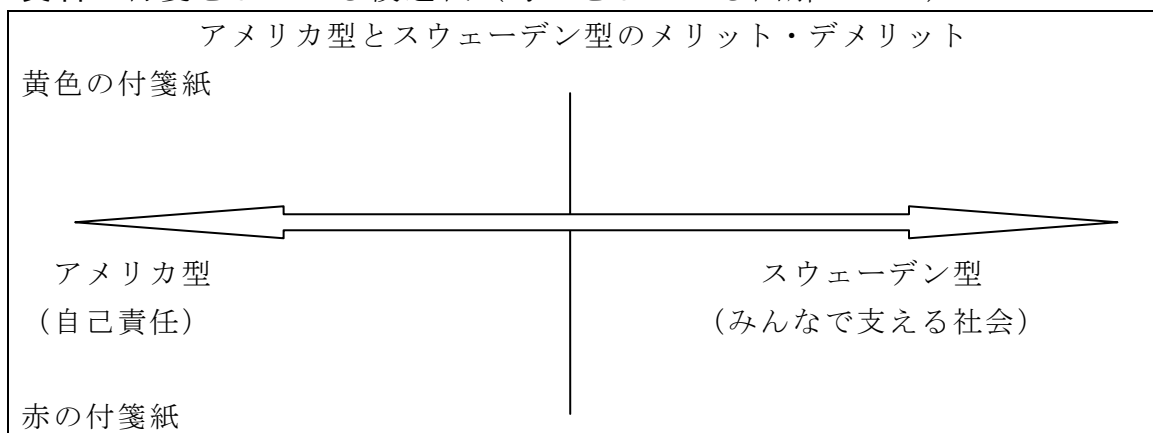
<生徒に働きかける教師の視点として>

歳出では、政府や地方公共団体も経済の主体の一つであり、経済活動が様々な条件の中での選択を通して行われ、財源の配分についても対立と合意・効率と公正に基づいて考えるようにする必要がある。少子高齢社会や多額の公債など、解決しなければならない諸問題を見つめさせる中で、「あなたの50年後を考えてみよう」という切実感のあるテーマを与える。50年後にも当然、年金で生活ができると考えている生徒に対して、財政の課題を教え、生徒に驚きを与えたい。単元の最後にスウェーデン型とアメリカ型の社会保障制度についての材から、自分の今までの考えをもう一度見直し、将来、税の負担者として納める税金の使われ方を、自分の将来とかかわらせて考えさせたい。日本の財政について「自分のこと」として捉え、社会に参画する意識を育てていきたい。

7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	「あなたの50年後を考えてみよう」をアルバムシートに箇条書きでできるだけたくさん書く。一人ひとり発表する。	・自分が65歳という高齢人口に達することを確認させ、どのような社会がよりよいかを考えさせる。【拡散】
2	「もしも警察や消防が有料だったら」という課題から財政の役割について話し合う。	・市場の働きにゆだねることが難しい仕事を、国や地方公共団体が行っていることを理解させる。
3	「平均的収入のサラリーマンが一生に納める税金の額っていくら」から、税金の種類と役割についてまとめる。	・統計資料とワークシートを用意する。
4	「今必要な社会資本とは何だろう」という問いから、社会資本と環境保全についてまとめる。	・統計資料を用意する。
5	日本の社会保障制度についてまとめる。	・統計資料とワークシートを用意する。
6	日本の財政について、統計資料から読み取り、課題を考える。	・統計資料を用意する。 ・対立と合意・効率と公正の視点で考えさせる。
7	「あなたの50年後を考えてみよう」という発問に対し、スウェーデン型とアメリカ型とを比較して少子高齢社会の中の社会保障のあり方について、グループによる話し合いを通して考える。	・それぞれのメリット・デメリットを書いた付箋紙を貼るなどして、さまざまな考えをまとめていく。 ・グループごとの話し合いの結果を発表させる。【収束】
8	「自分の人生をデザインするワークシート」にまとめる。これからの社会をどのように生きるか考える	・自分の人生やこれからの社会について考えさせることで、社会参画の意識を高める【統合】

8 資料 付箋をまとめる模造紙（考えをまとめる図解ツール）



※まとめるための視点…自分たちにとってメリットのある内容は黄色の付箋紙、デメリットとなる内容は赤の付箋紙に記入して貼り、グループで考えをまとめる。

公民的分野 実践事例③

1 実施時 平成24年10月

2 単元名 民主政治と政治参加 地方自治

「わたしのふるさと：誰もが住みやすい町ってどんな町？」

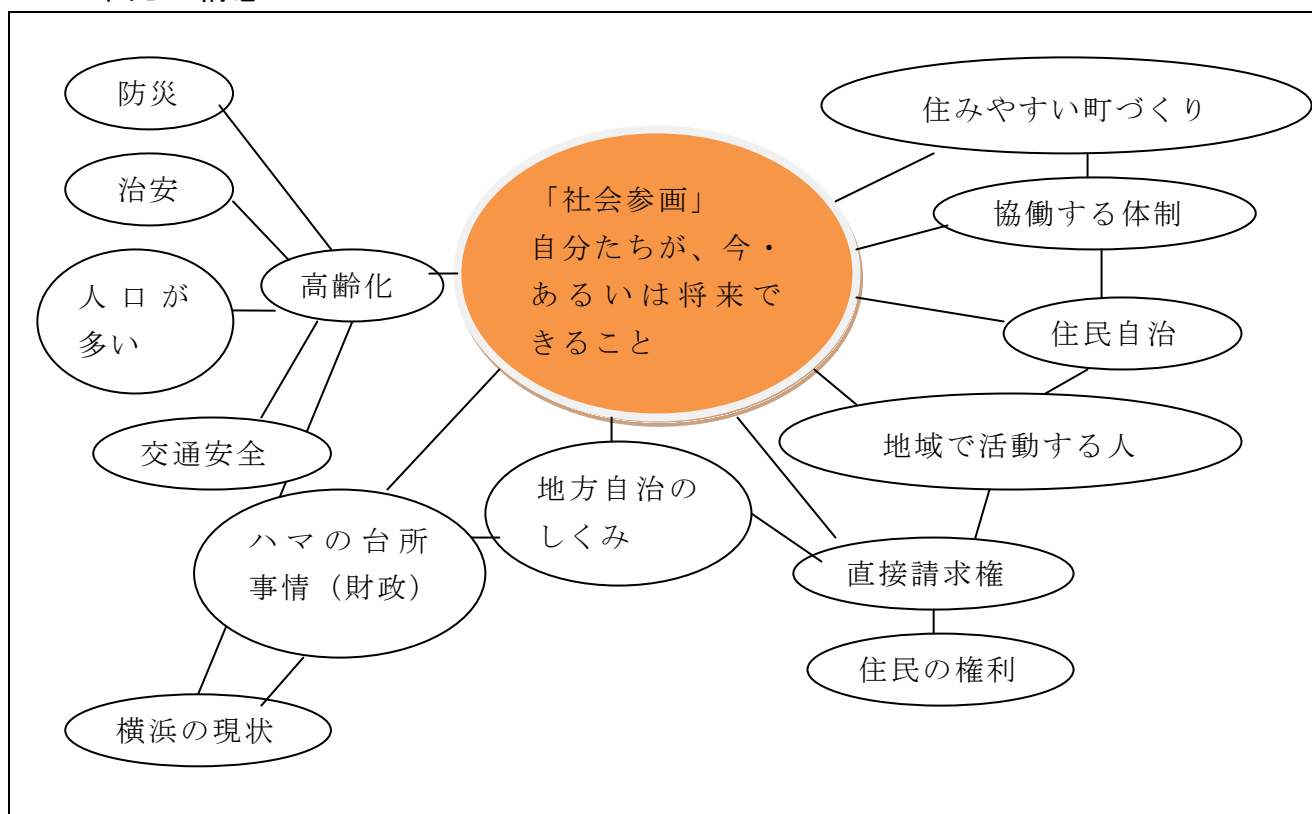
3 単元のねらい

本単元では、生徒が住んでいる横浜市港南区の現状と課題を通じて、地方自治のしくみを理解させ、社会参画の態度を育てる。また、港南区の課題と解決方法について、自分が、現在または将来できることを考える。

4 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> 自分たちが住む地域の課題と、地方公共団体が行う政治に関心が高まり、社会参画への意欲が高まっている。 住みやすい町づくりについて、民主的な政治と政治参加の方法について考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 資料をもとに、地方自治の現状を知り、具体的な参画方法について考えている。 自分たちが住む地域の課題を多面的・多角的に捉え、社会参画の意義について考察し、その結果や過程を適切に表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決にむけて適切な資料を選択したり、読み取ったりしている。 地域で活動する人の話から、課題点を聞き取ることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方自治は、住民参加による住民自治が基本であることを理解し、その知識を身に付けている。 地方公共団体のしくみや財政の現状を理解し、その知識を身に付けている。

5 単元の構想メモ



6 視点

〈生徒を視点として〉

地域の課題について、高齢社会の課題について実感している生徒は少なく、港南区の治安の悪化や商業地のさらなる発展、交通事情などについて課題と考えている生徒が多いと思われる。また、中学生がボランティアとして地域活動に参加しているものの、その活動の意義や重要さを深くとらえている生徒は少ない。

そこで、超高齢化を港南区の問題点と捉え、誰もが住みやすい町ってどんな町かを考えさせることで、自分たちが行なっている地域活動が地方自治の一環であることを実感させ、社会参画の意欲を高めさせる。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

横浜市は人口 370 万人を超える大都市である。生徒にとって、地方自治は身近な政治といわれているが、横浜市を題材にあげると、大都市ゆえに地方自治を身近と感じることは難しく、切実感がない。

そこで、生徒が住んでいる港南区に焦点をあてたい。港南区の人口は 22 万人と、やや減少傾向にあるが、その中でも大きな課題としてあげられるのは、2030 年には、85 歳以上が 16, 000 人を超える超高齢化である。生徒は資料を読み取ったり、地域で活動している民生委員・青少年指導員の話の聞いたりすることで、地域の現状を知り、切実感をもって、社会参画の重要性を考え始める。

まず、自分が住みたい町について自由に意見を発表させる。班別に、学生・子育て世代・高齢者など、さまざまな世代の立場で考えさせることで、町は世代の違う多くの人々から形成されていることを実感させ、「誰もが住みやすい町ってどんな町」なのか、考えを拡散させて単元の導入とする。

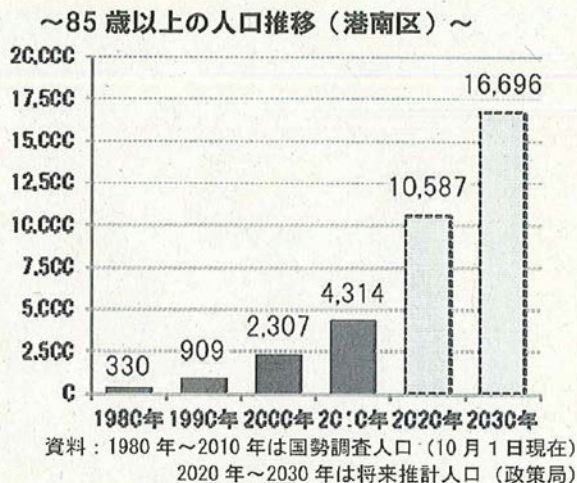
次に、自分が住んでいる町の現状を知ることで、考えを収束させていく。例えば、超高齢化の現状については、生徒は驚きを隠せない。自分たちが住みたい町とのギャップに驚き、急速に進みゆく高齢化を身近にある課題としてとらえ、より住みやすい町にするために必要なこと、自分たちにできることを考え始める。また、民生委員、青少年指導員から地域が抱える問題点・現状について話を聞くことで課題を切実に捉えるようになることが期待できる。そこで、地域の自治に住民が参画できることを知り、生徒の社会参画への意識を高め、民生委員や青少年指導員が所属している組織について知り、その後の地方自治のしくみの学習につなげる。その後の授業展開として、直接請求権をはじめとする地方自治のしくみ、財政についてそれまでに学んだ現状と繋げながら学習する。最後に、港南区で学んだことを横浜市の現状にあてはめて考えさせることで、人口が増え続けている北部、人口が減り高齢化が目立つ南部、工業の盛んな地域、観光が多い地域など、横浜市の現状に迫り、多種多様な課題とその解決方法について考えさせることで、いったん統合した思考から新たな拡散が始まっていく。

7 単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	夢や希望・・・ 自分たちの町が住みやすいか？港南区の良い点と課題点あげて、自分たちの住みたい理想の町を発表する。	・生徒のさまざまな発想を生かすように、授業の雰囲気工夫する。【拡散】
2	現状を知る…① 資料を読み取り、自分たちの町の現状を知り、課題や解決方法を考える。	・港南区の将来の人口推計などの資料を提示し、課題を読み取らせて確認させる。【収束】
3	現状を知る…② 民生委員や青少年指導員など、自分たちに身近で、地域のために働いている大人の話聞く。	・民生委員や青少年指導員から仕事内容や港南区の現状などを聞いて、切実な課題をしてとらえさせる。 ・また民生委員や青少年指導員などのしくみを知らせる。【収束】
4	自分たちが、現在または将来、地域の一員として、できることを考える。	・将来、自分ができることを考えさせる。【統合】
5 6	地方自治のしくみ・直接請求権・地方財政など基礎的なことを確認する。 また、横浜市の地方自治の現状について知る。	・ワークシートなどを活用する。 ・「ハマの台所事情」などの財政についての資料を活用する。

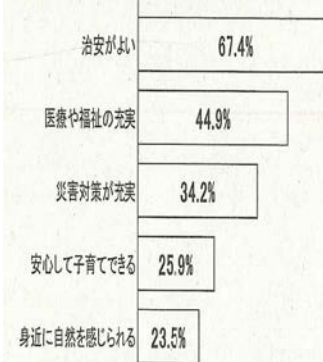
8 資料 港南区についての資料 『平成25年港南区運営方針』から

2 超高齢社会の現状



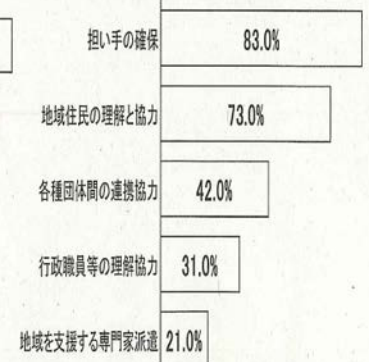
4 望ましい区の将来像

平成23年度 区民意識調査結果（一部抜粋）



5 「協働の地域づくり」を充実させていくために重要なこと

元気な地域づくり推進フォーラム（25.3開催）参加者アンケート



平成 25 年 11 月吉日

各都県・政令指定都市教育長 様
各市町村教育委員会教育長 様
各都県・政令指定都市社会科研究会長 様
各中学校長 様
関係各位

関東ブロック中学校社会科教育研究会 会長 石上 和宏
群馬県小学校中学校教育研究会中学校社会科部会 部会長 吉江 剛

平成 26 年度
第 32 回 関東ブロック中学校社会科教育研究大会
平成 26 年度 群馬県小学校中学校教育研究会中学校社会科部会 研究大会

群馬大会 開催要項（第 1 次案内）（案）

大会主題 「主体的に学ぶ力を育てる社会科教育の展開
－思考力・表現力の向上をめざして－（仮）」

主 催 関東ブロック中学校社会科教育研究会
群馬県小学校中学校教育研究会中学校社会科部会

後 援 群馬県教育委員会 全国中学校社会科教育研究会
（申請予定） 前橋市教育委員会 伊勢崎市教育委員会 渋川市教育委員会
吉岡町教育委員会 玉村町教育委員会 榛東村教育委員会

期 日 平成 26 年 10 月 31 日（金）

会 場 群馬県内 3 中学校にて分野別に開催
（予定） 【地理的分野】 伊勢崎市内中学校
【歴史的分野】 前橋市立富士見中学校
前橋市富士見町田島 954-1
（関越自動車道前橋インターまたは渋川伊香保インターより約 30 分）
【公民的分野】 吉岡町立吉岡中学校
北群馬郡吉岡町大字南下 1383-2
（関越自動車道前橋インターより約 20 分、駒寄スマートインターより約 5 分）
※全体会も各分科会場にて行います

- 公開授業 ○ 地理的分野（1年・2年）
○ 歴史的分野（1年・2年）
○ 公民的分野（3年）

日 程

8:30～	9:00～	9:50～	11:00～	11:20～	12:10～	13:10～	14:00～	14:20～	14:40～	16:10～
受付	全体会		休憩・移動	公開授業①	昼食休憩	公開授業②	休憩・移動	分科会		諸連絡
	開会行事	記念講演						分野提案	研究協議	

※18：00より前橋市内ホテルにて関ブロ理事会を、18：30よりレセプションを開催いたします。

記念講演 講師 未定
※各会場にて、各分野の専門家の先生にご講演いただく予定です。

参加費 4000円

その他 ○平成26年8月に第2次案内を各都県の教育研究会事務局に送付させていただきます。
○参加申し込み方法や公開授業の内容等の詳細は2次案内送付時にご案内させていただきます。
○本大会に関するお問い合わせは、下記のところまでお願いいたします。各会場校へのお問い合わせはご遠慮ください。

〈 お問い合わせ 〉 群馬県小学校中学校教育研究会中学校社会科部会事務局
事務局長 石沢 拓也
群馬県前橋市上沖町612番地 群馬大学教育学部附属中学校
TEL 027-231-4651 FAX 027-231-3164